へ13
3706
37

門 へ13
號 3706
巻 38-37

幻日記十九編之叙

戯場へ往て幕の永き。と草双紙の次編の遅きと。最待遠きものゝ。と世間の婦女子の言へるもとなん。然い思ひ知りあらん。作者の樂屋ゝ透間なるゝゝ。

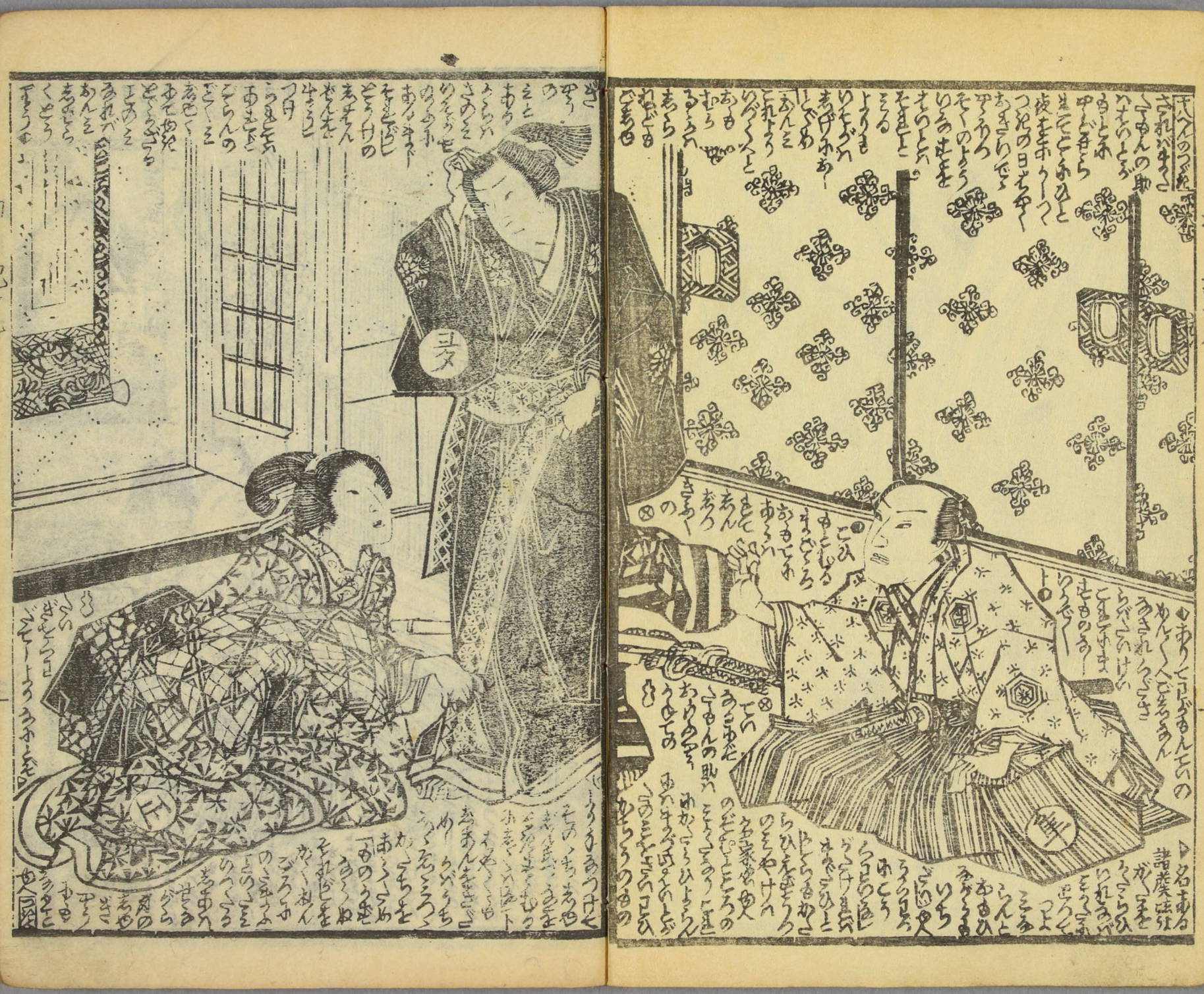
重工の振附書工の本讀彫師摺師の道具方。と舞臺の飾ゝ手の拵ものゝ初日の標報を張る迫ゆるゝゝゝ日の重る人。何時とそ。

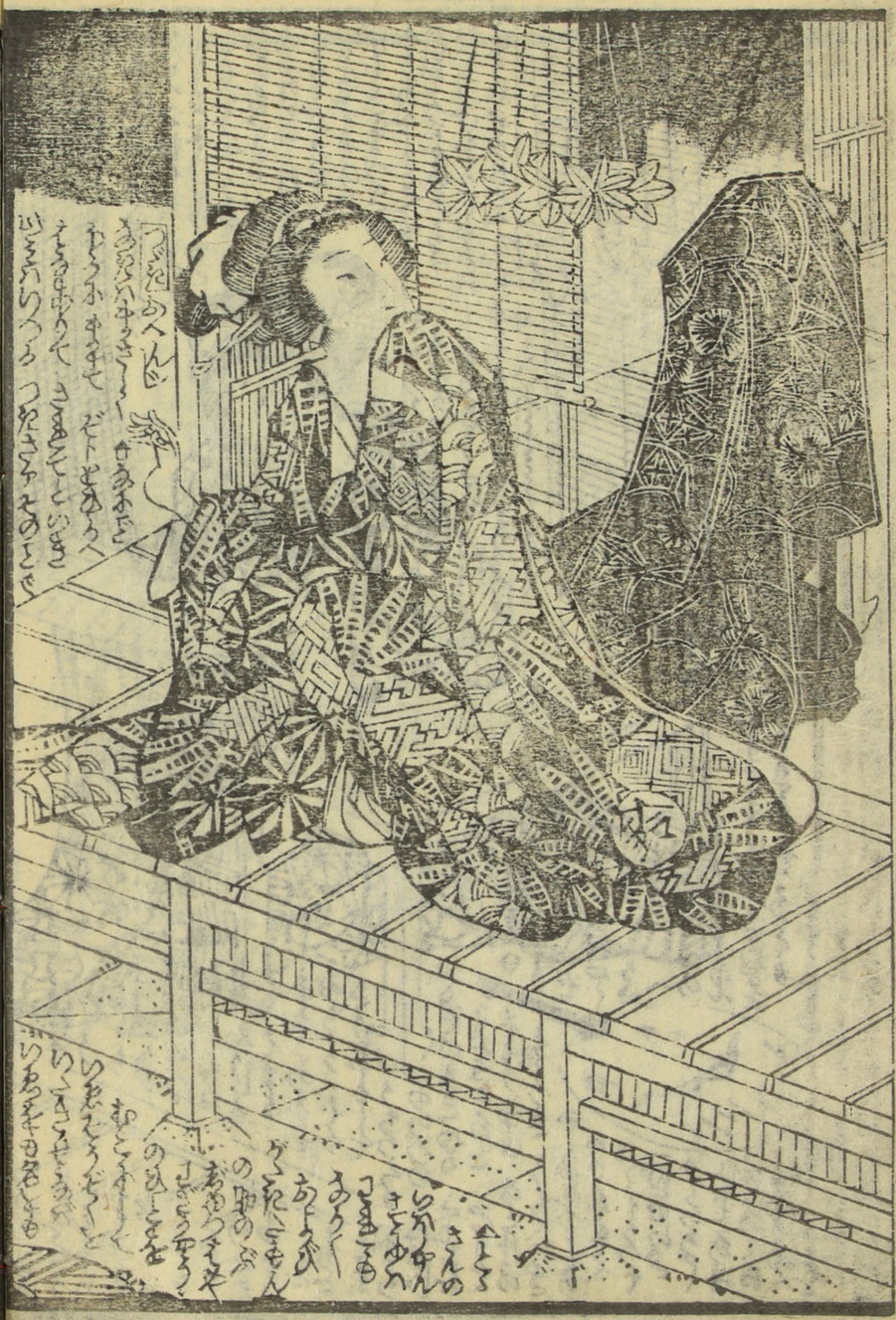
看官ゝゝ御催促のお手ゞ鳴るとそ。紅英堂よりして急ぐとゆゞ一寸ゝゝもの木の替りゆ。チョンゝ指子ゝ序文を綴り。第十九編の幕明ゝゝゝ

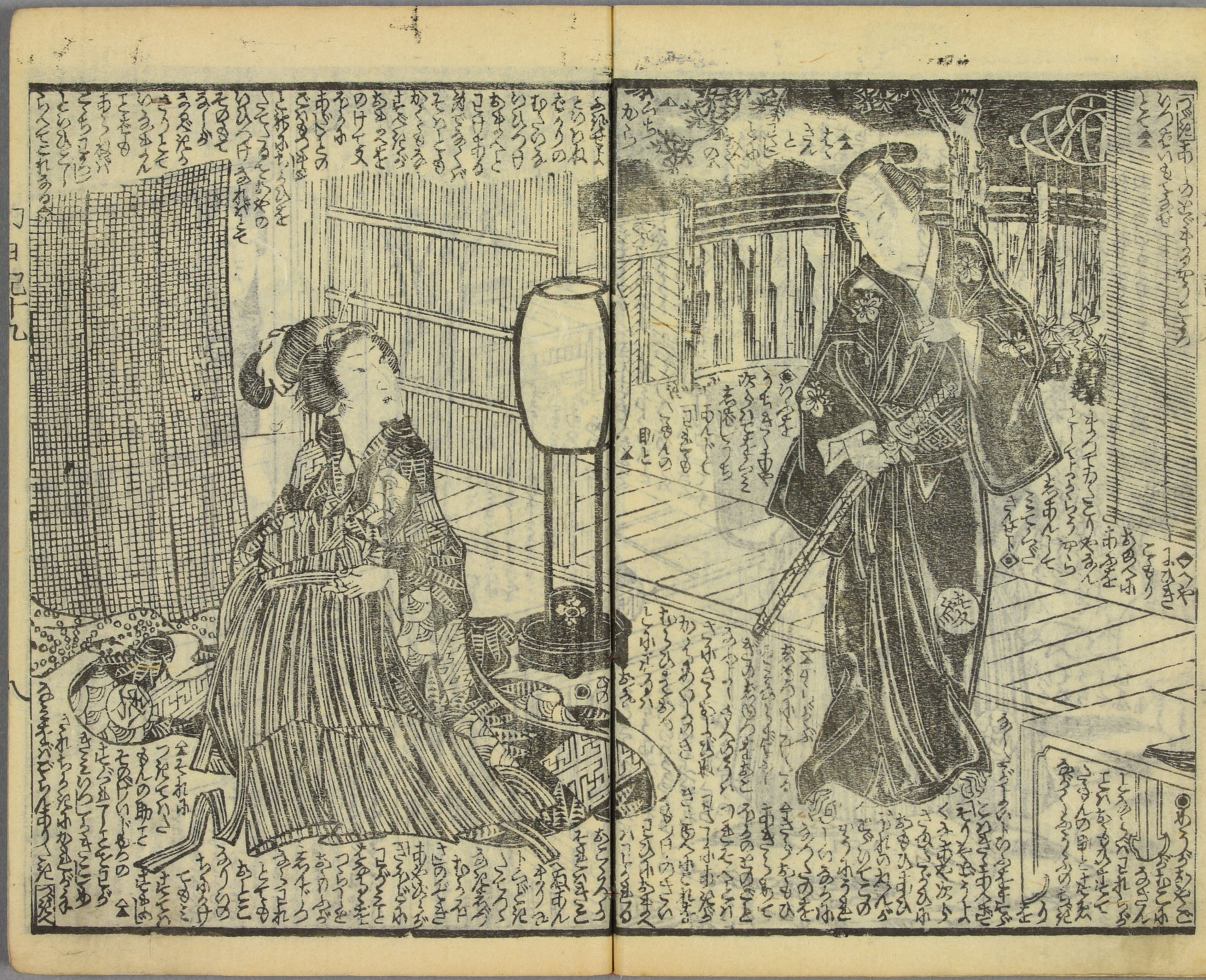
已己新春吉旦

為永春水記

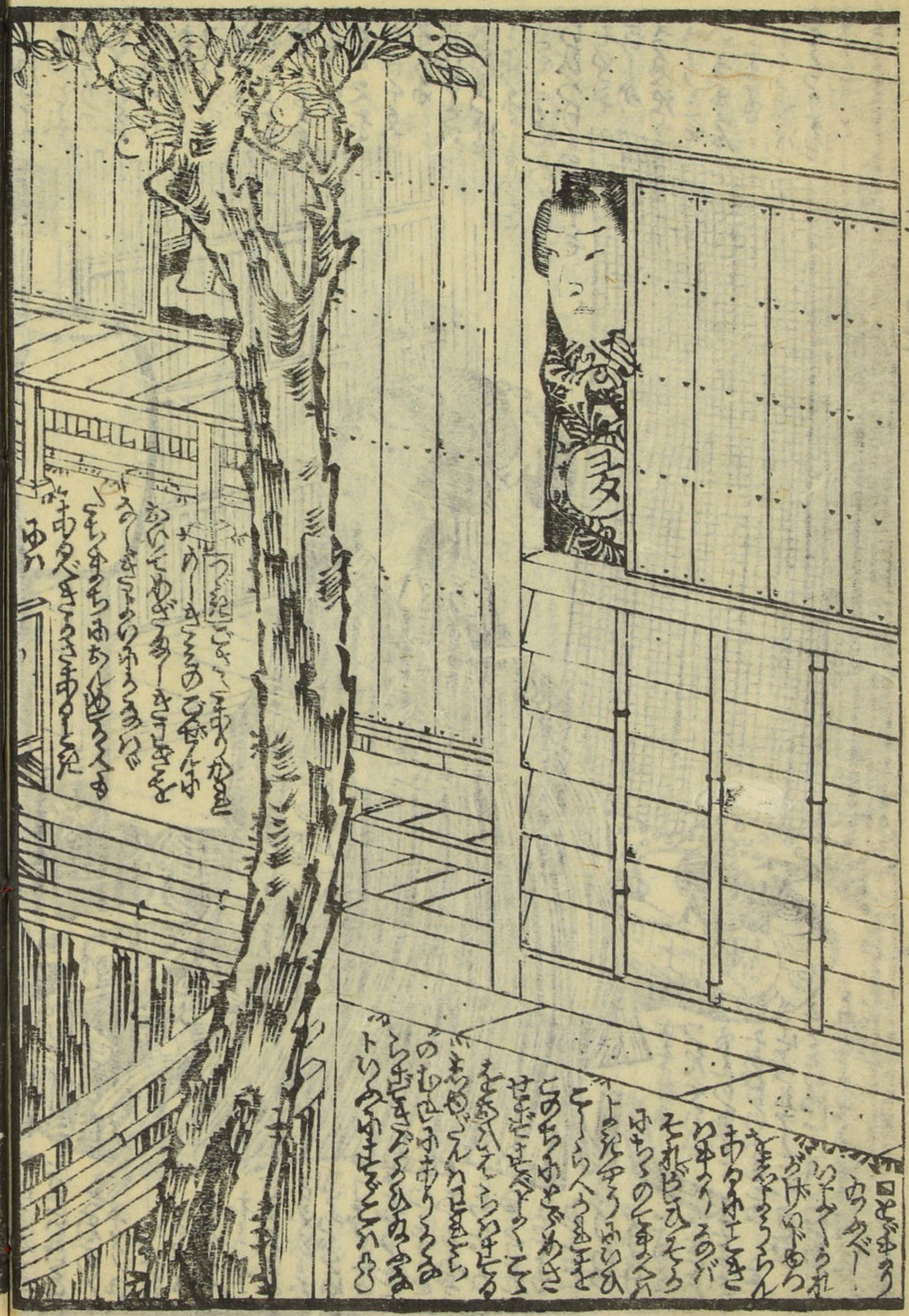
田村麻呂
朝臣

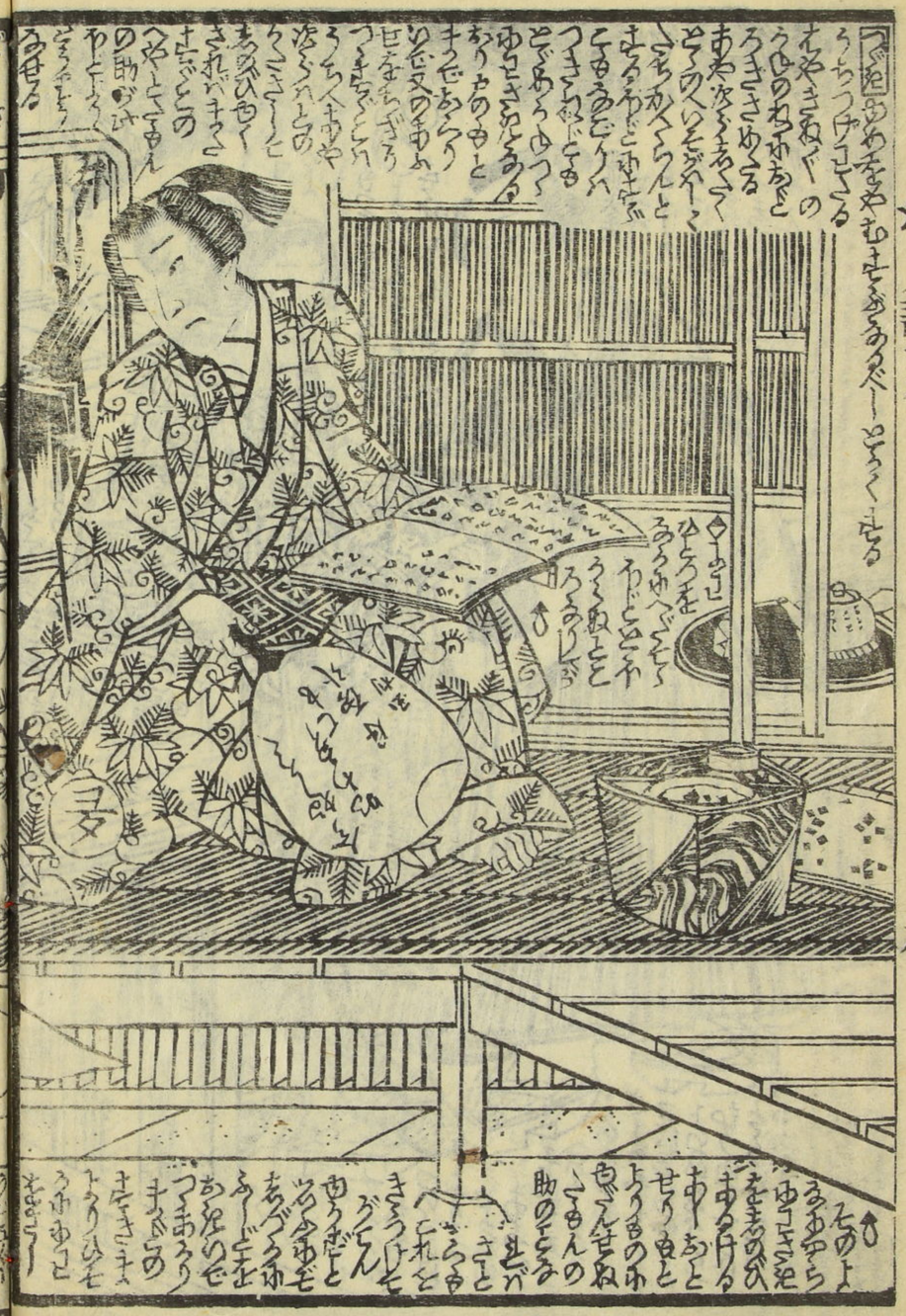






綾
鈴





實母散

中橋南詰東ノ側 新堂孝輔製

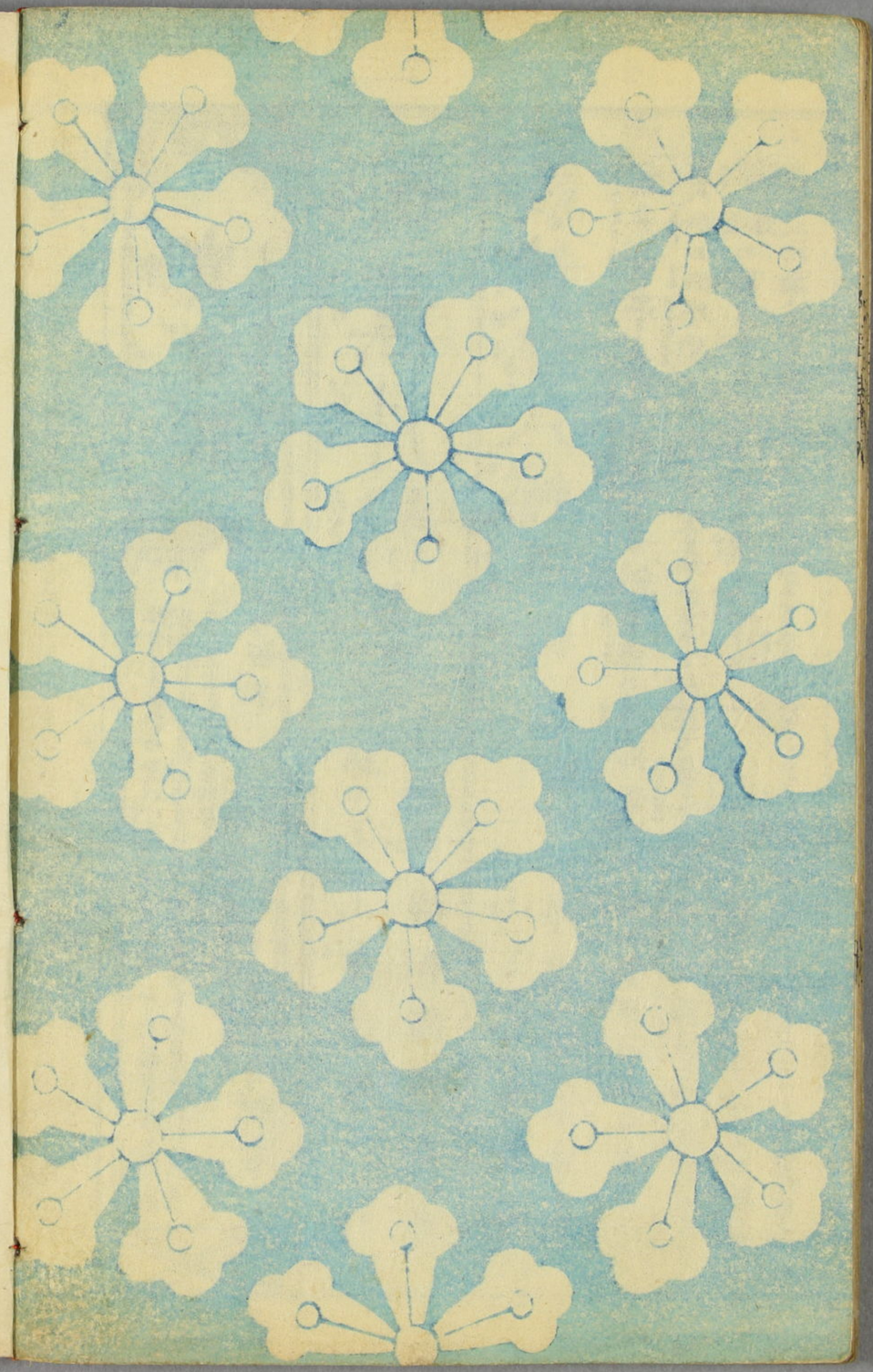
柳蔭月朝妻

九編近 柳朝樓國貞画

藪黄鶯八幡不知

山々亭有人作

錦朝樓芳市画



福